

サンボ論議にみる黒人差別観

——大学生の調査を手がかりに——

岩 本 裕 子

I. はじめに

「黒人の古いステレオタイプが日本で息を吹き返す：販売会社はサンボ人形，黒人マネキンを擁護し，人種差別の意図なしと主張」という見出しの記事が、『ワシントンポスト』に掲載されたのは88年7月22日のことであった。同記事には，有楽町そごう百貨店に置かれた黒人マネキンの3段抜きの大きな写真が付けられていた。この記事は，同紙の極東共同総局長マーガレット・シャピロが，愛嬢のおもちゃを買うために都内の百貨店を回ったときに，黒人人形サンボやビビンバを目にし，さらに黒人の肉体的な特徴を際だたせるためにデフォルメしたマネキン（同記事の写真）に出会ったために書かれた記事であった。¹⁾偶然にもこの記事の出た直後に，自民党の軽井沢セミナーで渡辺美智雄代議士が，アメリカ人の家計の破産を黒人と結び付ける発言をし，86年秋の中曽根元首相の知的水準発言を呼び起こし，アメリカ側からの非難をあおることにつながった。²⁾

アメリカの日本大使館への抗議殺到，黒人議員連盟，黒人企業家連盟からの日本製品の不買検討などが伝えられ始めた。抗議に対し，そごうは即日マネキン撤去，サンリオは，問題とされた商品の製造中止と全面回収を断行した。夏場の人気商品で一挙に撤去は難しかったにもかかわらず，小売店との契約関係をあえて破棄した形で，一シーズンの損失は15億円と言われた。こうした日本人の黒人差別報道に反応した堺市職員有田利二氏は，自ら黒人を題材にした商品を集め，日本人の差別の表れとみて，8月11日，家族3人で「黒人差別をなくす会」（以下「なくす会」と略記）を結成した。有田氏の

長男（当時9才）を会長とする「なくす会」は、黒人差別商品を製造販売している企業に対し、「自発的な改善の実施を呼びかける手紙」を出した。その結果、カネボウのバブル・フェイス・ガム製造中止、カルピスの黒人マーク使用中止が決定した。³⁾

さらに、「なくす会」は『ちびくろ・さんぼ』（以下『さんぼ』と略記。本の題名になっているものは「さんぼ」、俗称の場合は「サンボ」と使い分ける。）絶版を要求する運動を展開し始めた。人種的偏見と差別に対する配慮を欠いた出版物のひとつとして取り上げたものだった。当時日本で出版していた11社に改善を訴え、大手3社が絶版を決定し他社もそれに続くことと伝えられた。即決を避けた岩波書店は、もともと1953年に「岩波子どもの本」を出版する際、原書（Helen Bannerman, *THE STORY OF LITTLE BLACK SAMBO*, 1899）が日本では正式に翻訳紹介されていないことから、シリーズ第一巻とすることを決定したのだった。初版刊行以来120万部以上が読まれ、日本の子供達にもっとも読まれた大ベストセラーであった。しかし最終的に「差別的と言われる本を出し続けることはできない。」との理由で絶版を決定した。⁴⁾

以後、絶版をめぐる賛否両論議論された中で、多くのシンポジウムが持たれたり、小冊子が出されたりするうち、⁵⁾「主人公は黒人ではなく、黒人問題とは関係ない。」また「子どもの本としての議論がないのが残念。」という意図で子ども文庫の会から『ブラック・サンボくん』（題名が「サンボ」になっている。）が出版されるに至った。「サンボ」論議にさらに拍車かけられることになった。⁶⁾

以上のような経過で日本に巻き起こったサンボ論議をきっかけとした黒人差別問題に関して、今の大学生はどの様に考えているのであろうか、彼らにとって黒人差別ということはどの様な意味を持つのか、さらに黒人差別に限らず「差別」全般に対し今の大学生はどの様に考えているのかの調査の結果が本稿である。調査の対象となったのは、本学現代文化学部の学生164名と、筆者が非常勤に出ている他大学2校の学生69名との合計233名であ

る。(人数の内訳詳細はⅢ章に記す。)調査に回答した学生のほとんどは登録している講義から考えて、アメリカ史、アメリカ社会あるいは黒人問題に興味をもっていると思われる。そのために、今の大学生の意識全般を代表する調査結果とは断定できないが、興味がある、または予備知識を持つ学生が差別に対してどう考えるかという結果報告にはなれると思う。

II. 問題提起—学生への調査内容

調査結果報告の前に、まず学生に配布した調査内容を提示しよう。

新聞記事を中心とする以下のような内容の資料3枚(B4サイズ)を読ませた後、「黒人差別問題に関する調査」として5題の質問(①～⑤)を用意した。差別問題とすることで、本音の回答を得ることが困難であることは予想できたが、調査用紙の中にも、また資料配布の際にも、くれぐれも本音で回答するように念を押した。しかも「できるだけ長い文章で」と但し書きしたので、B4サイズの回答用紙には、ほとんどの学生から、用紙一杯細かい字で書かれた回答が返ってきた。

【配布資料1】

『ワシントンポスト』の人種差別報道に対し、「厳しい米の非難、困惑の日本企業」「無知は罪だと知った」という小見出しでの「時時刻刻」欄「悪意なくとも黒人差別」(『朝日新聞』'88.8.9.)を提示し、この記事に対する同紙の「声」欄及び「朝日イブニングニュース」VOICE欄で、8月中に一般読者の間で展開された論議の記事の切り抜き合計8件(以下小見出し)。

- ・「私の妻は黒人、差別は寂しい」(ヨガ教師 54才 '88.8.17.)
- ・「不誠実な言葉『悪意はない』」(教師 33才 '88.8.17.)
- ・「日本への非難、いじめの一種」(学生 21才 '88.8.17.)
- ・「利益が先立つ異文化の扱い」(学生 23才 '88.8.19.)
- ・「黒人の人形は差別なのか」(高校生 17才 '88.8.21.)
- ・「黒人差別問題無神経さから」(学生 23才 '88.8.22.)

- ・「黒人差別の弁解にうんざり」 (米国教師 '88.8.27.)
- ・「子供への影響にも目開いて」 (米国主婦・教師 '88.8.27.)

【配布資料 2 右】

『さんぼ』絶版後にあえて出版した前述の『ブラック・サンボくん』をめぐる、「出版中止求める声に『優れた作品』と版元」という小見出しで掲載された読書欄「なお続く『サンボ』論議」の記事の切り抜き。

(『朝日新聞』'90.4.22.)

【配布資料 2 左及び資料 3 左下】

「黒人差別をなくす会」をめぐる記事 2 種類。

- ・「黒人差別の痛み、肌で感じた：「なくす会」の有田さん一家米国の旅——偏見に満ちた数々の展示品：日本製品との類似点に驚き——」

(『朝日新聞』'89.9.12.)

- ・「ハジメ、ペンパルになって」 (『朝日新聞』'89.11.29.)⁷⁾

【配布資料 3】

『さんぼ』の絵本に描かれた次の 3 種類のイラスト⁸⁾を提示し、どのような印象を受けたかを質問。回答用紙には preferable と unpreferable を書いておき、いずれかに○をつけさせる。(次頁イラスト参照)

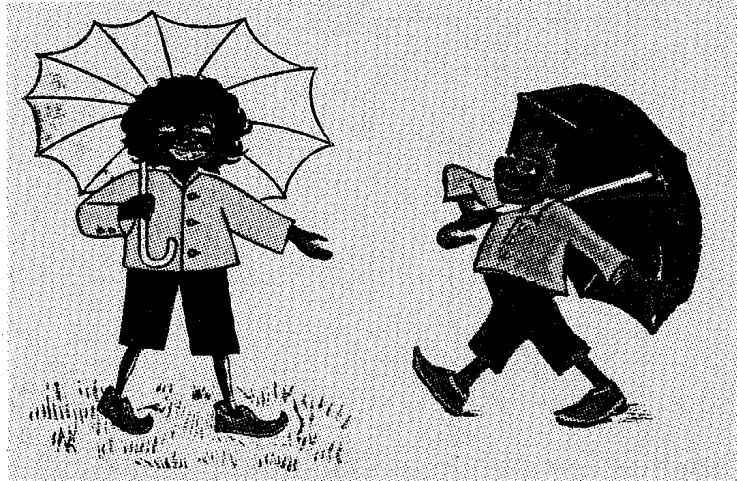
- 原作版で用いられたイラスト
- 日本語版で最も読まれてきた絵本のイラスト
- インドでの話であることを考えてそのイメージで描かれたイラスト

以上の 3 枚の資料を読ませた後、資料に基づいて以下の 5 題の調査に回答させることとした。

【黒人差別問題に関する調査】

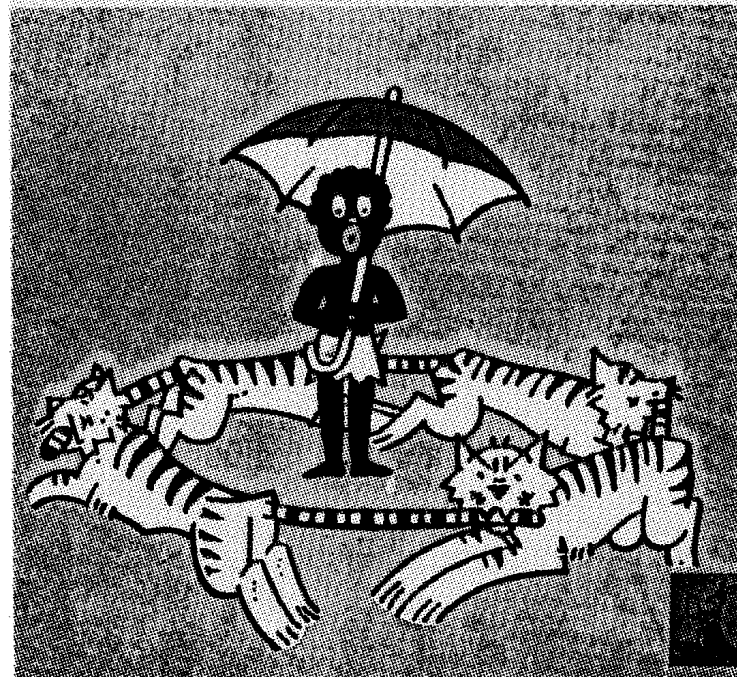
この調査は、3 枚の資料を題材に、あなたの黒人差別に関する意識を引き出すことを目的としています。かねてより関心のあった人、あるいは全く考えたこともなかった人など、様々でしょうが、ここでは建前ではなく本音で回答し、自らの差別に関する意識について認識して頂きたいと思います。質問は 5 題あります。できる限り、長い文章で別紙に回答して下さい。

A



C

B



- ①資料1は、'88.8.9付け朝日新聞の「時時刻刻」の記事をめぐる「声」欄への投書をまとめたものです。あなたもこの論争に参加するとしたらどのような意見を持ちますか。
- ②『ちびくろ・さんぼ』のお話を読んだことがありますか。資料2右の「サンボ」論議について、あなたはどう考えますか。
- ③資料2左と3左下で紹介されている「黒人差別をなくす会」の存在について、あなたはどう考えますか。
- ④資料3は、「差別的といわれる本を出し続けることはできない。『さん

ぼ』の役割は終わった」との理由で絶版とした岩波書店の『ちびくろ・さんぼ』の絵とイラスト2枚です。イラスト A. B. C. に関する質問に対し、適当な単語の方を○で囲み、さらにこのイラストからのあなたの印象について記して下さい。

- ⑤3枚の資料は、黒人差別を中心にまとめました。但し『ちびくろ・さんぼ』については、アメリカ社会における黒人というよりはイギリス植民地下の有色人という面が強いかと思います。諸外国を見るまでもなく、われわれ日本人自身の差別についてはその歴史が多くを語っています。差別に関して、あなたはどのように考えますか。最後の質問となりましたが、心のままに、本音を語ってほしいと思います。

III. 調査回答をまとめて

今回の調査に回答した学生の内訳は以下の通りである。

・東京女子大学現代文化学部地域文化学科 (A)				103 名
		コミュニケーション学科 (C)		29 名
		言語文化学科 (L)		22 名
		無記名		10 名
・駒沢大学	文学部	歴史学科	女子	13 名
			男子	21 名
・帝京大学	文学部	国際文化学科	女子	16 名
			男子	19 名
・総計				233 名

では、質問の番号順に回答をまとめる。この節では、学生の回答をまとめるにとどめ、筆者による批評はIV章に譲り、極力私見は避けることとする。

①「悪意なくとも黒人差別」の記事をめぐって

学生の回答をまとめる手順として、3段階に分けてまとめてみたい。まず、学生が漠然と持つイメージや感想をまとめ、次に日本人の反応に対する異なる立場（擁護か批判か）からのまとめ、最後に学生が考える今回の問題への解決策あるいは展望のまとめとしたい。

今回の論争のきっかけとなったサンリオの「サンボ & ハンナ」（これと同様に「ビビンバ」というキャラクターがあり、シャーペンの付属品として所持していると書いた学生あり。）という商品に対して学生は、大半が「かわいい」という印象を持っている。それらを購入した時に、差別意識など全くなかったと断言している。かわいらしさから愛用していた学生の中には、サンリオが発売を中止するという報道に、単純に「どうして？」と不思議に思っただけだと言う。彼女達（いずれも女子大生で男子学生からは同様の反応なし。）は、購入時に差別はなかったというものの今回の論争を知ってもう使えなくなったとも付け加えている。

類似の黒人女性を連想させる印判をかつて持っていたという学生は、回答用紙にその印判を押してきた。「ただ単にかわいいだけで使っていましたが、大学に入って差別を学んでからこの判子は使わなくなりました。差別を知ることによって私の購入するものも、使うものも変化したのです。」と但し書きしている。

そごう百貨店のマネキンについては、実際に現物を見た学生が2名いて、1名は「正直言ってそのマネキンは気持ち悪かった。」と答え、もう1名は、横浜そごうで見た時に「このような所に黒人を使うとは人種差別はなくなっているなあ」と感じたと言う。

カルピスマークに対する印象は、「小さい頃から愛飲していたので、マークが消えて悲しかった。」と残念がる立場と、「子供心にカルピスマークは恐ろしく、見る度におびえていた。」とマークに否定的な印象を持つ立場がある。マーク廃止については、「これぐらいでそう受け止められるんだ」とか「廃止にはびっくり！」とカルピスマークに言及した学生は一様に廃止に驚きの気

持ちを持っている。

以上のように、発売禁止、マネキン撤去、マーク廃止という一連の事象に対し、無条件で賛成する学生は少なく、「単なる廃止で人種差別撤廃にはつながらない」「発売中止が本当の解決にはならない」という回答をしている。資料1の「黒人の人形は差別なのかな」(高校生 17才 '88.8.21.)の記事に賛成する学生が多く、白人をキャラクター化した物は良くて、黒人だと人種差別になると言う方が「よっぽど黒人を蔑視しているのではないだろうか。」と回答している。人種差別と解釈するのは考えすぎだとか、差別、差別と特別視することが差別ではないかとする見方もある。

差別を感じていなかったとする学生が大半であるのに加えて、黒人に対して憧れの気持ちを持っていると言う回答が、主に男子学生からよせられた。大リーガーの野球選手を初めとするスポーツ選手、映画スター、オペラ歌手、ロック歌手、トランペッター等の実名をあげ「かっこいい」と憧れの思いを語っている。個人的な憧れだけでなく、マイケル・ジャクソンのコンサートや、マイク・タイソンの試合に夢中になる日本人の心理の中に人種差別の目はないと断言している男子学生もいる。

黒人に対する差別だけがどうして問題になるのだろうかという疑問を持つ学生も少なくない。本学と他大学の学生の中で、全く同様の事例をあげた学生が数名ずついる。まず、中華どんぶり(ラーメン)のパッケージに描かれている中国人のキャラクターは論議にならないが、あれは中国人差別ではないのかという発言である。さらに、今回問題の黒人キャラクターが、「サンボ & ハンナ」ではなくて「太郎 & 花子」という日焼けした日本人の子供だったら許されたのだろうか、同じ人形でも「トム & ベティ」と言う名前なら良かったのだろうか、という疑問である。この発言をした彼女達の一様の考えは、軽率すぎる日本企業への批判はしつつも、黒人というとすぐ差別と結び付けることに問題があると述べている。

以上は、筆者が提供した資料を読む範囲での学生の感想のまとめであるが、次に幼児期の実体験から差別観について考えた学生の回答を2例あげ

る。まず、幼児期を南アフリカ共和国で過ごしたと言う本学2年生（C科）の回答には、アパルトヘイトのもとでの日本人家族は、「名誉白人」扱いで、白人家庭同様黒人女性を女中に、黒人男性を庭師に使っていたが、「女中であつた黒人女性に大変かわいがってもらつた。今思い出しても懐かしい。」とある。加えて「私は黒人が好きである。黒人が差別されることは耐えられない。」と語っている。次の例は、本学2年生（C科）が小学生の頃、自宅にホームステイした白人の少女と絵を描いて遊んだときの体験である。白人の少女は自らを肌色に塗り、日本人である学生のことをオレンジ色で塗つたという。学生は「それだけのこと」と言いながら、「少なからぬショック」であつたと語り、自分の立場を黒人に置き換えたら「たかがキャラクターとは言つてられない気がします。」と結んでいる。幼児体験2例は、差別する側とされる側のそれぞれ逆の立場からの差別意識を浮き彫りにしているが、両者の経験を通しての差別への反発は同じと言えよう。

これまでまとめた調査①への回答は、単なる印象や感想の域を出ていないが、さらに学生の回答は日本人の対応に対する意見へと発展していく。彼らの回答を大きく分けて、日本人擁護の立場と日本人非難の立場の2つに分けることができる。各々の立場をまとめてみる。

日本人を擁護しようとする立場は、日本人、白人、黒人の三者への意見としてまとめることができる。まず日本人である自分達は、ダッコちゃん人形に代表されるように、昔から黒人キャラクターが好きであつたはずだとして、日本人が心から悪意を持って作つたとは考えられないと擁護し、サンリオに対しては同情の意を表している学生もある。さらに世界で嫌われる日本は、何をやっても非難されてしまうと嘆く。同様の意見を持つ学生の中の10名余り（全員本学1年生）が日本を「単一民族の国」だから黒人の気持ちを理解できなくても仕方がないと見なしている。

白人に対する意見として、黒人差別は本来白人がしてきたことであるにもかかわらず、白人は自らのことは置いて日本人を一方的に攻撃するのは「日本叩き」の一部だと、アメリカ白人に反感を持つ学生もいる。理解不足、勉

強不足の日本にかなり責任はあるが、白人グッズは良くて、黒人グッズがタブーというアメリカ白人の見方自体が根本的に差別であるとしている。今回のことは単なるアメリカからの「日本いじめ」に過ぎず、アメリカは日本国内のことに干渉し過ぎであるとして、逆にアメリカを非難している。最後に日本人擁護の学生の黒人に対する意見の大半は、「黒人の被害者意識が強すぎる」と言うもので、反面、日本人は差別に対し鈍感であるとも言っている。

他方、日本人を非難する立場の学生の回答をまとめてみると、擁護の意見をそのまま否定した形の意見となっている。企業側の「悪意があったわけではない」との返答は子供のような発言で、「薄っぺらな商業主義」で受けを狙う企業は無神経すぎるとする。また批判されてからの企業の弁明は頼りなく、はっきりした意志表示をするべきであったとし、企業側の意見は日本でしか通用しない内容だとする。つまりサンリオの製造中止は、企業自らの差別意識を証明しているようなものだと言う。

今回のことは、単に「かわいい」で済まされる問題ではなく、自分達の感覚だけで「かわいいと思った」などと言うのは、恥の上塗り、罪の上に罪を重ねるようなことだと厳しく批判する。アメリカ側からの非難は、決して「日本いじめ」ではないと断言し、日本人の人種問題への鈍感さを指摘している。黒人キャラクター廃止によって、日本人の失うものはたかが知れているが、黒人キャラクターを存続させた場合の黒人の受ける痛みは大きいとする。

『ワシントンポスト』の報道は、黒人のステレオタイプのイメージ打破のためには意義深いと評価する学生は、本当の黒人とつきあおうとしない日本人、白人の影響で黒人を遠ざけようとする日本人を批判している。こうした無知な行動を止めないと、世界の国から相手にされなくなるとも憂う。日本人批判派の学生が共通して持つ日本人観として、自ら有色人種でありながら、白人崇拝の傾向があり、白人以外の人種を差別しているという印象を持っている。中には、「国際化ではなく、明治初期の西欧化をそのまま叫んでいるに過ぎない。」との意見を持つ学生もいる。

以上、学生の持つイメージのまとめから日本人の反応への賛否両論をまとめたところで①の回答集計の最後に、学生が考える人種差別をなくすための解決策についてまとめてみたい。

日本人擁護派も批判派も共に認めているのは、日本人の黒人理解の不足、黒人の痛みへの無知があげられる。「無知は罪だと知った」で留まらず、その後どうするかが問題だと言う。ただ、どこまで本当に知ったのだろうかとの疑問、知ろうとする気がないことへの批判は繰り返されるが、この論争をきっかけに日本人が差別に対し、もっと敏感にならなければいけないと呼びかけている。「身近に感じる」と「理解している」とことが全く違うことを知って、事実を知り、理解する努力をしたいと反省と共に提示している学生がいる。

では理解をすれば差別をなくせるかということになるが、学生の意見は次のようである。根本的な価値観の相違は直せず、最終的に両方が納得する結末は望めないと言う悲観的な意見がある反面、無意識に植え付けられた差別意識というのは意識的な差別より更生しにくいかも知れないとしながらも、解決策を提示している。たとえば、黒人キャラクターをなくしていくことは逆効果ではないかとして、偏見を防ぐためにも、善意ある黒人キャラクターを、まだ先入観のない子供達に見せていく必要があるとする。教育の場で早い時期から差別をテーマにする機会を増やすことで思慮のない差別は避けられるのではないかとも言う。こうした意見を持つ学生の解決策の対象は、現在の日本の子供達とすることができる。

今回の批判の対象となった企業に対しては、一方的に謝るだけではなく、ぶつかって行ってほしかったと言う意見がある。謝ることでその裏にやはり差別の存在を感じ、がっかりしたと言いつつ、謝る前に「差別のつもりはない」とはっきり言ってほしかったとする。体裁だけを繕わず、差別される側がどれだけ傷ついているかに気づいてほしいと主張している。

日本人の理解を要求すると同時に、理解のための情報不足の現在を考えてアメリカ黒人、白人両者からの情報提供を希望する意見もある。さらに、黒

人自身も消極的な廃止ではなく、積極的なプラス・イメージ作りこそ大事ではないかと、単に日本人に対してだけではなく、アメリカ側への要求もなされている。

日本人の他国への文化理解の必要性は必須のことだが、今回調査の対象とした学生のほとんどが、所属学科の性格上、国際文化理解を志していることから、彼らの回答の中に再三登場した言葉は、「異文化理解」とか、「国際理解」という表現であった。日本人の世界進出の著しさにもかかわらず、人種、民族、差別に対する意識の乏しさは、批判派以外の学生も指摘しているが、解決策として提示されたものは以上である。

②『ちびくろさんぼ』を知っていますか。

黒人差別問題のきっかけとなった一連の論争に関する質問を終えて、ここでは『さんぼ』絶版問題に焦点を絞った質問への学生の反応をまとめてみることにする。

まず、「読んだことがありますか」の問いについて、数人の「見たこともない」の回答以外は、ほとんど全員が「読んだことがある」と答えている。他大学の3年生(♀)からは「小学1年生の時の教科書に載っていた。私達世代で読んだことがない方が珍しい存在だろう。」と知らされた。低学年の時の教科書に載っていたことを知らせた学生は他にも数名いる。また本学の1年生(A科)は、この調査の後、自分の持つ絵本(岩波書店版)を筆者の所へ持って来て「保育園時代の連絡ノートには、きょうも『さんぼ』を読んで遊んでいました。と言う保母さんからの記入があり、この本は私の子供の頃の心の依り所だったようです。」と語った。⁹⁾

絶版の是非を論じる前に、彼らの持つこの絵本への印象をまとめてみる。物語の内容については、一様に「とても面白く奇想天外な物語」と評し、話の細かい部分は忘れても、虎がバターになりそのバターで作ったホットケーキを196枚も食べるというところを記憶している学生が多く、その話の奇抜さを評価している。また虎に襲われるという危険な状況を、自らの知恵で切

り抜けるという主人公の勇気と利発さを評価している。この話を賢い少年物語と受け取っている。主人公は、子供達の友人であり、夢を与えてくれるアイドルだとも言う学生がいる。

幼い頃読んだ学生の全員が、この物語から黒人差別を感じなかったと答え、この論争を知る前までは「どこが差別なのかわからなかった」と言っている。また物語の舞台について「虎がいる所だからインドで、主人公はインド人だと思った。虎＝インドの発想があった。」という他大学の3年生(♂)は、黒人差別と結び付いていることの不思議を語っている。逆に物語の舞台がインドであったことを全く知らなかった学生は、人数の上では多かった。同様に「サンボ」という表現が黒人蔑称であることを知らなかったと言う学生は全体の5%はいた。知らずに使っている蔑称の存在を他にも数例挙げて、知った以上無知を反省すると共に使わない努力をするとどの学生も書いている。

では絵本絶版に対しては、233名の回答を絶版反対、どちらとも言えない、絶版賛成(条件付き含む)の三通りに分けて集計すると、反対は全体の60%、中立は25%、賛成は15%であった。賛成の条件は、「この本を読むことで黒人に対する偏狭な見方を無意識に身につける危険があるなら」「差別を意識して故意に作られたのなら」「この作品の品位をこれ以上損なわないために」と言った内容で、解釈によっては絶版反対とも取れなくはない。

中立の立場の学生が25%いる結果に見られるように、この問題については、子供時代も、現在も彼らが、『さんぼ』の絵本に対して持つ意識に偏見や蔑視がないという思いと、今回のサンボ論議を知ってもなお偏見がないとは強く言えないという対立感情共存の感想が、全体的な回答の傾向である。学生自らが差別を感じないこの絵本が絶版に至った原因を、学生達は2つ挙げている。

まず、サンボの呼び名が蔑称だからいけないということである。呼び名を変えて(トムやマイケルではどうかとの意見もあり。)、同じ物語のままにしたらどうだろうかとの提案が同時になされている。次にイラストがいけない

ということである。インド人であるはずの主人公が、アメリカ黒人を連想させる容貌をしていること、その見かけが黒人をデフォルメして見えることは認めている。¹⁰⁾

これら2点を改善してでも版を重ねることを希望する学生達が、このサンボ論議に関して持っている感想は、「臭いものに蓋」や「腫れ物には触らない」式の考え方や水掛論ではないかというものである。差別の本だから絶版にすべきだという「なくす会」からの要望について納得いかないという学生もいる。それ以上に、出版社側の一方的な絶版措置に怒りを覚えている学生が少なくない。絶版要望以後、読者を交えた十分な議論がなされないままに出版社が一方的に絶版を決定したことに問題があったとする。出版中止を行った会社側の日和見主義が日本社会全体を象徴しているとか、絵本絶版で日本人の黒人差別撤廃にはつながらない、という意見が多い。

差別につながるものを闇に葬る前に、実体を理解することが大切だとする学生達の目は、この絵本を読む子供達に向けられ、この絵本から子供が差別を感じるはずはない、もし感じたとしたらそれはそう教えた大人の責任だとしている。その実例を本学の2年生(L科)が綴っている。小学生の低学年をアメリカで過ごした彼女は、人種を越えた友人を多く持ったが、近所の日本人達の反応を次の3例を挙げて説明する。まず白人の友人なら笑顔で通り過ぎた。ユダヤ人の友人なら「あら」と眉をしかめた。黒人の友人なら「家に帰ったら手を洗ってうがいするのよ。」と言われたということだ。同じ学生から、イギリスのジャムの瓶はちびくろサンボと同じ様な顔のイラストが描かれていたとも知らされた。こうした大人が植え付ける差別意識こそ子供に最も大きな影響を与えるのであって、絵本そのものが原因ではないとする。

差別的な児童図書で言うならば、『アラビアン・ナイト』に描かれているアラブ人の妻の間男の黒人の醜悪さや、『ベニス商人』に登場するユダヤ人など他に例は多いはずなのに、絶版にされず版を重ねていることを考えれば、今回の『さんぼ』絶版は理解できないというのが、絶版に反対した60%の学生の意見の中にある。

③ 「黒人差別をなくす会」の存在について

筆者が学生に提示した資料は、「なくす会」が黒人企業協議会の招きで訪米した時（'89夏）の報告と、来日した黒人女性ミッションのメンバーの1人が、会長である少年に会った時（'89秋）の報告の2つの記事である。これだけの資料で「存在についてどう考えますか」と言うのは余り無謀かとは思ふ。学生からも、これだけの資料ではよくわからないと言う回答が多くよせられたが、調査資料を作成した段階で入手できた資料であったこと、差別問題の一端として「なくす会」にどのような印象を持つかと言う程度でも回答を得たかったため、敢えて質問のひとつに加えた。

「なくす会」への意見を大ざっぱに分けると、学生の回答は無条件に賛成、条件付きで賛成、存在そのものへ疑問視、積極的に反対という4つの立場に分けられる。例外はあるものの、概して言えるのは、大学、学科あるいは専攻領域、性別という分類でその立場が分けられるということである。

4つの立場にわけてまとめてみる。まず、無条件に賛成と言うのは、本学A科（アメリカ専攻）及びL科の学生、他大学の女子学生（学科問わず）に多い。「存在はすばらしい」「立派な行動だ」「差別に気づかせてくれた」「世界から非難を浴び始めている今の日本に必要な存在だ」など肯定的意見を述べている。

条件付きで賛成と言うのは、本学A科（アメリカ専攻）及びC科の学生、他大学国際文化学科の学生（性別問わず）に多い。なくす会の活動のきっかけ、日本にいて黒人差別に接する機会がないのにどうして始めたのか、という素朴な疑問が出され、それらがはっきりすれば賛成であると言う立場である。彼らの他の条件には「『さんぽ』絶版を主張することについては理解できない」「細かい物の廃止のための活動に終わらないでほしい」などがある。

存在そのものに疑問を持っているのは、本学A科（アジア専攻）及び他大学歴史学科の学生（性別問わず）が多い。その疑問の第一は「たった9才の少年にはっきり黒人差別をなくすと言えるのか」というものである。動機づけがわかっていないためでもあるが、「何の役に立つのだろうか」「そこまで

する必要があるのだろうか」「会に参加することで差別解消につながるとは思えない」「差別，差別と騒ぐことがおかしい」「日本国内の黒人差別の資料収集はかえって反日感情をあおらないか」といった意見である。

積極的に反対と言うのは，他大学歴史学科の男子学生（東洋史，日本史専攻）に顕著に表れる。彼らが一様に主張するのは「なぜ黒人だけなのか」という疑問である。日本国内に内在する差別にはどうして目を向けないのかという問いかけである。日本人は決して単一民族ではなく，国内でもアイヌ人差別，部落差別をかかえている。その歴史が語るように，韓国，朝鮮人，中国人への差別も続いている。回答の中には，重い余って裏まで綿々と続き，「アメリカへ行って名誉市民になることより，アジア人差別をなくす会を作ることの方が重要だ」と4倍角文字で書かれてある。

以上の回答は，そのまま質問⑤に持ち越され，彼ら（積極的に反対派及び存在に疑問を持つ立場）の回答は続いていく。回答の続きについては，質問⑤にまとめる。

④ サンボのイラストから受ける印象及び感想

イラストから受ける印象については，二者択一の回答方式にしたため，数字で集計することが可能であった。以下はその集計である。なお，本学では記名は強制ではなかったので，10名の無記名回答があった。また6名は無回答であった。コピー印刷の不備から見えにくいという点があり，筆者の反省事項でもあるが，無回答の彼らからはイラストから受ける印象だけの回答を積極的に控えたいという意志が伝えられていた。

表から一目瞭然であるが，イラストAについては「好ましい」という印象を持つ人数の倍以上が「好ましくない」と答えている。Bについては全く逆の結果となり，Cでは「好ましい」が上回るものの，だいたい両者つりあっている。原作本のイラストAを好ましく思わない学生のほとんどが，イラストの目元，口元の嫌らしさをあげている。Bのイラストを見て，幼い頃読んだ『さんぽ』の絵本の表紙だと懐かしがる学生が多かった。学生達が読んだ絵本

大 学		東京女子大学				駒沢大学		帝京大学		総 計
学科 or 性別 人 数		A 103	C 29	L 22	? 10	♀ 13	♂ 21	♀ 16	♂ 19	
A	○	26	9	8	2	3	7	8	8	71
	×	74	18	14	8	10	13	8	9	154
B	○	65	14	11	7	8	17	13	10	145
	×	35	13	11	3	5	3	3	7	80
C	○	55	14	16	4	7	13	9	4	122
	×	45	13	6	6	6	7	7	13	103
無回答		3	2	0	0	0	1	0	2	8

(?: 無記名, ○: preferable, ×: unpreferable)

が岩波書店版だということはここで明らかになった。「彼こそが幼なじみの、おりこうさんで心優しい少年です。」とすっかりセンチメンタルになった女子大生もいる。Cはインド人であること、アメリカ黒人ではないことを意識して描き変えた新しいサンボ君だが、多くの学生が「馴染めない」と答えている。彼らの読んできた絵本の影響で、頭ではインド人のはずとわかっている、サンボ像はやはりアメリカ黒人のようである。

⑤ 「差別」に関する考え

回答③ですでに出始めた学生達の見解は、最後の質問⑤になってかなり煮詰まったものになっていく。黒人差別にかかわらず、差別自体に関する意見を求めたために、その内容は回答③の時と同様、大学、学科、専攻領域、性別によってそれぞれ発展していく方向が異なっていく。

大ざっぱに分けて、アメリカ専攻の学生は、黒人差別問題を突き詰め、アジア専攻や東洋史、日本史専攻の学生は日本国内の持つ差別問題に言及していると言える。筆者の予想に反して、女性差別問題に発展させていった学生は、性別を問わずほとんどなく、中には「なくなったのかと思えるほど廃れてきている」という意見を持ち、「就職したらあるかも知れない」という学生

はいるものの、今は女性差別を意識する機会が少ないような回答であった。

差別の対象として学生が考えたのは、黒人の他には、日本国内の持つ差別問題として、部落、アイヌ人、沖縄県民、在日韓国朝鮮人、フィリピンなどアジアからの移住者、身体障害者、さらに国外ではアパルトヘイト問題、生きとし生けるものすべて（動植物を含めて）へと発展している。

今回の調査で扱ったサンボ論議のように、差別と思えるものを次々撤去、廃止していくことを続けていると「触らぬ神にたたりなし」とか「目を背ければいいのだ」といった風潮になりかねないとの懸念が出されている。後期に入って調査した他大学の3年生(♂)からは、最新の記事のコピー¹¹⁾を添付した回答が提出された。その記事には、「なくす会」が手塚治虫の遺作『ジャングル大帝』に対し、絶版要求に近い要望を出していることが書かれている。同書に描かれている黒人がステレオタイプで差別と偏見を助長していると言うものである。この記事を添付した学生からは「ヒューマニズムをテーマにした手塚作品に対して、なくす会の要求は言葉狩りに過ぎない。」と怒りにも似た回答が寄せられている。同様に「言葉狩り」という表現を用いた本学2年生(C科)は、『さんぼ』絶版はどうしても納得いかないとして「何でもかんでも言葉狩りをする方も幼稚だが、それを恐れて避ける方も問題意識が余りになさ過ぎる」と答えている。

黒人差別を身近に感じた学生として、横須賀在住の3名の例がある。本学3年生(A科)は、小さい頃から回りの日本人の大人から、黒人に限らずアメリカ人のステレオタイプについて聞かされ、現在までその印象が抜けなかったと言う。同様の感想は、他大学3年生(♀)から出され、「回りの中年以降の日本人はアメリカ人という白人をさし、黒人のことはアメリカ人とは呼ばず黒人と呼ぶ。偏見は両者に共通してあるようで黒人に限らない。人間は自分と見かけが違っただけで本能的に嫌悪感を持つものらしい。」と客観視している。また他大学2年生(♂)は、「差別をしているつもりはないが、近くに黒人を見た時には恐怖感や威圧感を感じる。これは自分だけではないと思う。」と書いている。

昨春日本でも封切られた、黒人であるスパイク・リー監督による映画『ドゥザライトシング』に言及した学生は多かったが、中でも他大学3年生(♀)は「何も解決のない終わり方に黒人差別反対の強いメッセージを感じた。」と書いている。このように、サンボ論議に留まらず、学生は身近な所から黒人差別問題を考え始め、考え続けていると結んでいる。

日本国内の問題として、日本が単一民族だと今だに思っている学生が10名余りいる以外は、大半がアイヌ人や沖縄県民の存在に触れているものの、直接接したという例はなく頭の中での理解の域のようである。しかし沖縄県出身という他大学の3年生(♀)からは、生の声が届けられた。大学の友人からの「英語をしゃべって暮らしているの?」「沖縄の人って靴を履いているの?」と言った心無い言葉に傷つくとしながらも、彼女は次のような本音も語っている。「沖縄県は日本の中でも所得が低く貧しい県ですが、そこに台湾やフィリピンから出稼ぎに来る人を見てなんとなく優越感を持ったことがあります。」ということだ。

国内の差別問題で最も大きいのは部落問題であろう。1922年の水平社決議に始まる差別解消運動の歴史は長く、学生の中でも同和教育を受けたことへの感想が多く語られている。主に女子学生だが、「知らなければ知らないで済んだことなのに、知らされてしまった。知らされ、嫌だった。」とか「これから子供達には教えない方がよいと思う。」といった一様に拒否反応が出ている。高校時代に横浜から関西に転校したと言う他大学2年生(♀)は、関西で初めて聞かされたが、回りの人に「余りそのことは言わない方がいい」と言われたという経験を書いている。他大学の日本史専攻の学生(♂)数人は、部落問題の歴史的背景を詳細に記し(eg. 江戸時代の社会不満の中和剤の役割、河童の意味等)、言われ無き差別に怒りを表している。

在日韓国朝鮮人についての叙述は、主に本学アジア専攻の学生(A科)からなされた。同和教育と同様に、中学時代に社会科の授業でビデオやプリントで正しい知識を与えられたという本学1年生(A科)は、授業のお陰で韓国人に対する差別意識はなく、むしろ日本人として韓国への責任を感じると

書いている。回答の中でこうした教育を受けたのはこの学生だけであった。この問題に触れている学生の多くは、身近にいる日本人（両親や肉親）の蔑視発言に対する嫌悪や怒りを綴っている。特に顕著な例は、本学1年生（A科）が、入学時の第2外国語希望調査に「朝鮮語」と書いて、両親に叱られ口論になった話がある。彼女達は、身近な差別に対し同調せず、怒りを持っている。横須賀在住の学生の黒人への偏見の例とはやや異なった反応である。

'90年5月の韓国大統領訪日で、天皇の謝罪が問題になったが、多くの学生がこのことに言及している。大半が、「謝って済むものではない」「根本的な差別意識が改善されなければ何の解決もない」といったもので、こうしたことが論議されること自体「日本が韓国より立場が上だ」という意識がまだ日本人に残っているからだと批判している。ソウルオリンピックに触れた学生は、韓国側も日本に対して心を開いてほしい、そうしないと両国間に未来はないとまで言っている。

個々の差別問題に関する学生の反応をまとめたが、最後に差別全般についての学生の意見をまとめてみたい。学生の回答の出発点として、差別は悪いもの、いけないものという考えがある。人間の行為の中で最低のものとしてもいる。理想的にはなくならなければいけないものであり、解消していかなければならないものだと言う。しかし多くの学生がそれを認めながらも、解決することは不可能であるとする。断言したのは全体の20%であった。

歴史を見る限り、差別があって社会が成立してきた、将来も根絶されることはないだろうというのが彼らの論理である。中には、差別は人間が作ったものだから人間の力でなくすことは可能なはずという学生も数人はいる。不可能だと断言しなかった学生の中にも、完全に否定する学生はいない。彼らの多くは、文明の発展段階で必ず出てくるものとして認め、人間は差別という方法で上下関係や自己の存在を確認しているのだと語る。自分を高く見せたがる生き物である人間は、自分より劣っている人を見ると優越感を持つとも言う。「上には上がいると思うと苦しいが、下がいるからいいやと甘えてい

た方がはるかに楽」と本音を語る他大学2年生(♀)もいる。

これらの差別は、人間の持つ本能としての差別意識であるが、サンボ論議に見られる人種差別や、日本国内の身分や民族差別に対しては、多くの学生が解決はできなくても改善していかなければならないとしている。改善のためには、差別される側の立場の理解が必要なことは、回答①から繰り返されている。日本人は都合の悪いことは公にせず沈黙して済ませたり、嫌なことは避けて通る風潮があるとして、昨今問題の政治家を含む大人の日本人の改善を迫っている。しかし、自らを考えた場合、人間が自分以外を完全に理解することなど「絶対」できることではないとして、気が付いた時点で改めるのではないのだろうかと言う他大学4年生(♂)もいる。日本人への批判としては、他者を理解する前に自分自身がわかっていないのではないか、自らの民族や国家に対する誤解を正すことが先決ではないかと言う意見もある。

調査を依頼したときの筆者の要求通り、学生達はかなり本音を語り、自己反省も含めて日本人への冷静な批判と、差別される側を思う気持ちを浮き彫りにした回答をよせてきた。当初の筆者の意図ではなかったが、結果的にこの調査は、黒人差別を初めとする差別一般についての認識を深めるための、差別解消運動の一環になってしまった観は否めない。

IV. おわりに

「はじめに」の中で、「黒人差別問題に関して大学生はどの様に考えているだろうか」「彼らにとって黒人差別とはどのような意味を持つのだろうか」という問題提起を行った。その答えはすでにⅢ章での詳細な回答集計で出尽くした観があるが、本章においては筆者の若干の私見を交えながら、大学生に与えた影響の最終確認をしたい。

今回の調査の質問を、内容で分類すると2つに分けられる。まず①と③と⑤の回答は最終的には「差別」という同じ土俵の話となり、重複回答も多かった。この3題の質問では、学生は黒人差別、さらに黒人に限らず差別一

般について、学生の興味と接する機会に応じて回答してきたと言える。この回答の傾向でもわかるように、学生に限らず誰でも、自分自身が何らかの接点を持っているものに対してしか発言できない問題であるとも言える。知識があるだけでも接点になりうるが、それが不十分な知識の場合（白人側からの一方的な黒人観を受け入れた日本人はこの例と言えよう。）接点とはいえない。正しい知識を持つこと、引いては正しい理解をすることが現在の日本人に求められている。学生も再三指摘している通り、人種問題、差別問題に対する日本人（学生自身も含めて）の意識の低さをまず認識することから、理解の一步を始めなければならないのが現状であろう。

次に②と④への回答をひとつにまとめて考えることができるだろう。これは『さんぽ』絶版をめぐる論議で、学生のほとんどが絶版反対と答えていることはすでに述べた。幼い頃読んだ絵本だからと言う感情的な回答が多かったと同時に、言論、表現の自由と差別問題とを対比させてこの絵本に関しては、「言葉狩り」の域を出ないのではないかという意見が圧倒的であったことは興味深い。ストーリー性を高く評価するものの、内容とイラストとの不調和（eg. 虎の存在、特に岩波書店版における登場人物の容貌など）を指摘し、それこそが差別を助長しているなら改善の余地ありとする意見には納得する。さらに出版社と読者との間の十分な話し合いを要求する指摘も評価に値するものである。

これら5題の質問への学生の反応は、本音の回答は期待できないかも知れないという筆者の予想をはるかに覆すもので、次の世代を担う彼らからの言葉に、回答を読み進む筆者が勇気づけられたようなくだりもあった。回答の内容を集計、分類してみて、当初の懸念であったアメリカ社会や黒人問題に興味がある学生が多いため回答が偏るのではないかというのは、不要な心配であった。彼らの回答は、黒人差別に偏ることなく、各々の興味に即し、思う存分枝葉を広げた回答になっていた。¹²⁾

同和教育について、「知らされなければ良かった」という女子学生の言葉には示唆を受ける。次の世代を育てていく立場として、知らせる必要のあるも

のと知らせなくて良いものを選別することは難しい。差別を受け、苦しんでいる人が世界中に多いのに、目の前からなくしてしまうこと、黙ることで解消できるのだろうかとの疑問も残る。「今から一歩ずつ進めば、5世代ほど後には差別の鎖を断ち切ることができるだろうか」という本学3年生(A科)からの回答の結びは、差別の難しさを端的に表現していると言えるだろう。

多くの学生の指摘通り、確かに差別はなくならないかも知れないが、だからと言って現状のままで許されないことは、'90年9月下旬から、時々刻々と伝えられる梶山法務大臣の黒人差別発言をめぐる報道が示している。中曽根元首相、渡辺美智雄代議士と続く日本人政治家の差別発言、暴言とも言える発言のあった後だけに、「またか」では済まされない憤りを感じる。内輪での放言が公になったとき「失言」となる。アメリカ側からの日本製品排斥呼びかけがあったり、アメリカ下院への梶山法相辞任要求の決議案提出にまで発展して、あわてて「謝罪」「陳謝」という形をとる。何度繰り返しても同じ行動しかとれない日本人のパターンを目の当たりにしている。梶山発言がある数カ月前に行ったこの調査の①への回答に、本学2年生(A科)は、「政治家の発言は、日本人全体の発言とされるのだから、慎重な態度を取ってほしい!」と書いている。

差別がアメリカ黒人に対してであったため、日米関係の悪化を懸念しての謝罪の措置であったのかも知れない。これが他の人種、民族、階級への差別発言であったら(梶山法相の差別発言は、黒人に対すると同様にフィリピン人女性や売春婦に対する蔑視発言である点が重大だと思うが、両者からの訴えは現在の時点ではまだない。)どの様に対応したのだろうか。多くの学生が回答の中で分析していたように、日本人は人種問題への理解に欠け、自国の抱える問題に関しても鈍感である。日本人の世界でのイメージも決して良いものとは言えないはずだが、(一般に、背が低く目はアーモンド型、眼鏡をかけ、出歯という描かれ方をしている。)知ってか知らずが、日本人からはほとんど反応がない。その理由が、10名余りの学生が言う「単一民族」のせいであるとは考えられない。

決して単一民族ではない日本人が、差別に対して無知であることにすら気づかず、罪を犯し続けるとしたら、世界の中で日本はどの様になっていくのか。回答の中で学生達が再三繰り返した「異文化理解」「国際理解」は、どこでどのような形で進められるのだろうか。この調査を通して233名の学生に蒔かれた種が、個々に芽を出し、「臭いものに蓋」と避けて通る大人ばかりの世の中にならないよう、自戒を込めて願うものである。

註

- 1) Margaret Shapiro, "Old Black Stereotypes Find New Lives in Japan" *Washington Post*, '88. 7. 22.; 東郷茂彦「チビクロサンボ騒動顛末記」『中央公論』'88. 10. pp. 221-222.
- 2) "Prejudice and Black Sambo", *Time*, 8. 15. 1988. p. 25.
- 3) 径書房編『「ちびくろサンボ」絶版を考える』径書房（以下『絶版を考える』と略記）'90. 8. pp. 57-60.: 本書は、「ちびくろサンボ」論議の集大成とも言える。児童図書『ちびくろサンボ』に関する文献を1950年代から追いながら、今回の絶版をめぐる論議に発展させ、二年間に渡るサンボ論議を客観的に、かつ緻密に読者に提供し、『ちびくろサンボ』問題を「考える」きっかけを与えてくれている。編集部が意図したように差別問題を考える上での「具体的な参考」（同書 p. 27）の役割を果たしたことは確実である。同書が多く日本人に読まれ、差別問題を考えるきっかけとなることに期待したい。
- 4) 「ちびくろサンボ廃刊の動き相次ぐ」『朝日新聞』'88. 12. 9.; 「岩波もサンボ絶版」『朝日新聞』'88. 12. 14
- 5) 論壇「「サンボ」は黒人差別あおるか」『朝日新聞』'89. 1. 6. をめぐっての「声」欄での論議.; 読書欄「論議続く『ちびくろサンボ』」『朝日新聞』'89. 4. 23.; 『「ちびくろ・さんぼ」はどこへいったの?』子どもの本の明日を考える会'90. 2. 18.: この小冊子は、'89. 7. 17. に行われたシンポジウム「『ちびくろ・さんぼ』はどこへいったの?」をまとめ、編集している。人種差別の本だからと、いきなり絶版にしてすむことだったのか、との問いかけから、子どもの本の明日を考えていくための今後のステップとしたいという意図で発刊されたものである。
- 6) 山本まつよ訳『ブラック・サンボくん』子ども文庫の会'89. 8. 31.; 山本まつよ「サンボくん」『季刊飛ぶ教室』#32, '89. 11., 同記事で、山本氏は「子どもと共に楽しむ本を失うまいとする気持ちを具体化した」だけで、「抗議とか抵抗ではない。」と、出版以来受けてきた抗議に反論している; 「なお続くサンボ論議」『朝日新聞』'90. 4. 22.
- 7) 「なくす会」の会長であるはじめ君にラブコールを送ったのは、日本・アフリカンアメリカン協会（JAAS）の招待で'89年11月に来日した18人の黒人女性ミッションの一人のハント氏（Carolyn J. Hunt）である。ミッションへの『ちびくろサンボ』に関するアンケート結果は、前掲の『絶版を考える』pp. 144-149. にまとめられている。なお、ハント氏に関する記事を含むミッション来日をま

とめた論考として、拙稿「米国黒人女性の意識——アフリカ系アメリカ人女性親善ミッション来日をめぐって——」『日米女性ジャーナル』No. 7, 1990. を参照されたい。

- 8) 三種類のイラスト出典は以下である。

A: 原作である Helen Bannerman, *THE STORY OF LITTLE BLACK SAMBO*, 1899, の表紙及び “And then was't Little Black Sambo grand?” と書かれた頁のイラストとして使われているもの。

B: 『岩波子どもの本第1号: ちびくろ・さんぼ』表紙に使われ、もっとも多く日本の子供達の目に触れたと考えられるイラスト。

C: 山本まつよ訳『ブラック・サンボくん』子ども文庫の会の最終頁に使われたイラスト。

- 9) 本稿に引用したBのイラストは彼女の絵本をコピーして拝借したものである。記して感謝の意を表する。
- 10) イラストに関する学生の言及から、彼らの大半が読んだ絵本は岩波書店版らしいことが類推され、さらに④番の回答でそれが明らかになった。
- 11) 『『ジャングル大帝』は黒人差別か: 手塚治虫, あの名作までヤリ玉に!?』『週刊文春』'90. 10. 25. pp. 206-209. この記事では、なくす会の会長は有田少年の母親になっていて、少年は書記兼会計ということだ。いずれにせよ家族3人で構成されていることは確かなようだ。
- 12) 今回の調査は、本学では出題者である筆者の目的を明示しないままでの回答依頼、他大学ではレポート提出という形を取った。回答に協力してくれた233名の彼らに、心からの謝意を表する。